

博士論文審査及び学力の確認の結果

学位請求者 大塚 直

学位請求論文 ボートー・シュトラウスの演劇—メディア時代の人間学—

審査委員（主査）谷川道子



《審査の結論》

大塚 直氏から提出された博士学位請求論文「ボートー・シュトラウスの演劇—メディア時代の人間学—」について、書面による各委員の事前評価を基に、2回の論文審査委員会と口述による最終試験をおこない、その結果、審査委員会は一致して、本論文が博士（学術）の学位を授与するに足る研究であるという結論に達した。

なお審査委員会は申請者の論文指導教員である谷川道子を主査に、副査として本学から、ドイツ現代文化や思想に詳しい哲学専門の岩崎稔教授と、メディア論にも詳しいドイツ文学・文化論専門の山口裕之准教授、他大学からドイツ語圏現代演劇研究の専門家で、その方面の仕事もたくさんされている専修大学の寺尾格教授と慶応大学の平田栄一朗准助教授に依頼し、その5名で構成された。

《論文の概要》

ボートー・シュトラウス(1944-)はいまなお第一線で活躍中の現代ドイツ演劇界を代表する劇作家だが、これまで日本では殆んど体系だって紹介されたことがなかった。A4版で総340頁に及ぶ大部な本論文は、その嚆矢となりえるものである。全体は四部構成になっていて、この作家の「右翼転向宣言」かと物議を醸したエッセイ『高まりゆく山羊の歌』(1993)への解説を分水嶺に、前半がドイツ再統一まで、具体的には第一部が70年代、第二部が80年代、以降の第三部が90年代、第四部が2001年9・11以降という大きな通時的な切れ目をおきつつ、「メディア時代の人間学」という視座で、初期から現在までの主だった〈改作劇〉を中心に、時代と対峙するシュトラウスの演劇美学を検証しようとする試みである。

第一部は、劇作家シュトラウス登場の過程を扱っている。いわゆる〈68年世代〉に属するシュトラウスは、演劇批評家としてその文学活動をスタートさせた後、劇団「ベルリン・シャウビューネ」に招かれ、その実践活動において「ブレーション」と言ってよい活躍ぶりを示し、演出家シュタインのもと、シャウビューネが西ドイツ屈指の劇団になっていくのに貢献し、同時に、ドラマトゥルク（文芸部員）としての仕事が劇作家デビューへの直接の起点になっていった。その内的プロセスを追いつつ、「風向きの変化(Tendenzwende)」と呼ばれる70年代半ばの社会状況の変化と「新主観主義」の思

潮のもと、孤独な人びとの内的世界を的確に描出する劇作家として次第に頭角を現していったこと、および 70 年代を通じて彼ら（68 年世代）の希望や前進の意味合いが次第に変質していったことが、ゴーリキー『避暑に訪れた人びと』改作の仕事を中心に於いて解き明かされ、戦後ドイツから現代ドイツへの転換の過程が考察される。

第二部は、80 年代におけるシュトラウスの活動を検証する。1977 年に起きた「西ドイツ赤軍」の「ドイツの秋」事件の後、左翼過激派に理解を示そうとする者は情報メディア産業を通じて扇動される（世論）によって袋叩きにあうような風潮が生まれ、また集団主義や普遍主義から個人主義や「多様性／差異」尊重へという時代の移行も目に付くようになる中で、シュトラウスは西側社会を代表する劇作家として、東側社会を代表する劇作家 H・ミュラーと並び称されるようになっていった。思想的にはフランクフルト学派の弁証法的思考に距離を置くようになり、日常の詩学を発見する現象学やメディア論的思考、「ニュー・サイエンス」に学びながら、次第に文学世界の伝統に〈精神的故郷〉を模索し、過去との連なりの中に現在を再検証し始める。80 年代におけるブームの絶頂で初演されたシェイクスピア改作劇『公園』には、多種多様なエピソードを散りばめる華やかな「記号学的劇作法」の背後に、戦後ドイツのトラウマや、現代人の自己意識の問い直しを図る傾向があることが指摘される。また 80 年代半ば以降、シュトラウス美学の要となってゆく「想起」の作法についても、長詩『わずか一日だけ客となった男の思い出』をもとに検証され、文化的記憶が形骸化してゆくメディア時代に抗して、過去の神話的伝承を今日的視座から再発見しながら、更新・継承してゆこうとするシュトラウスの美学に光があてられる。

第三部では、ドイツ再統一後の 90 年代の〈批判的言説〉の真空状態が、シュトラウスの位相から解釈される。発表する作品のほぼすべてが年間ベスト戯曲に選ばれ、批評家の寵児ともてはやされていたシュトラウスが、ベルリンの壁崩壊／ドイツ再統一後のさまざまな喧騒のさなかに発表したエッセイ『高まりゆく山羊の歌』（1993）は、その不明瞭かつ反啓蒙的な姿勢で、秩序創出的暴力を容認する「右翼」への転向とも、統一後の美的ナショナリズムへの接近とも解釈され、未曾有のセンセーションへと発展した。しかし、これはそういう政治的な文脈からのみ読み取られるべきテキストではなく、シュトラウス流の「悲劇論」なのではないかということが、実作との関連で説かれていく。騒動のさなかに発表された戯曲『イタカ』を、「歴史の終焉にともない始源への回帰が行われる」との視座からの現代における実践的な〈悲劇〉の再現前化の試みと解釈し、シュトラウスの言説のレベルにおける挑発と実作の「パフォーマンス性」との意識的な乖離や齟齬が指摘される。さらにドイツ再統一の風景を旧約聖書の創世記になぞらえながら批判的に描出した作品『ロートファンタジー』も、来たるべき歴史を創出しようともがきながら、結局「不在」だけが残され、それゆえに「想起」と「内省」の作法によって意味をもたらす芸術作品が生まれる、といったシュトラウスの文学観が重ねられて考察される。この二作品は、90 年代における歴史の真空

状態の中で、ホメロスと旧約聖書という西欧文学の二大源流を読み返しながら、今日の視点から再検討する試みとなっているのではないかと。

第四部の考察対象は、21世紀現在におけるシュトラウスである。80年代初頭から「弁証法」批判を繰り返して抽象的な思考法の無効性を宣告していたシュトラウスだったが、その方法論はさらに〈視覚像〉を重視する「現象学」的なものへとシフトしていったと考えられる。しかも平均的な日常の背景に永劫普遍の神話的次元を発見しようとする彼の眼差しは、屈折や歪曲化を示すバロックの眼差しに近いのではないかと、さらに現代における愛の不在を巧みに形象化するシュトラウス作品の魅力を「カップル原理」や「キス」や「恋人たちの言葉」を中心に解説、そして「裸体」や秘められた絶対的次元を突発的に顕現させようとするその演劇美学の核が解き明かされる。最後の章では、2001年ニューヨーク同時多発テロ以降、イスラム諸国と西欧諸国との間に顕在化した「文明の衝突」について、シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』改作の最新作『凌辱』（2005）をもとに検討される。最終的に、理想や解答を提示するのではなく、先鋭化させた問題性を提示して受容者を内省へと導くシュトラウスの〈演劇的な知〉のあり方が提起される。

全体として本論文は、30年以上の長きにわたって劇作品を書き続けてきたシュトラウスの演劇美学を、時代の文脈と思想的な展開のなかに位置づけつつ、舞台に向けての〈改作劇〉という形で、過去の前テクストに描かれた人間の姿の読みと、それを今日の矮小化された現代メディア社会に置き換えた時に見えてくる人間観の齟齬や不協和音を浮かび上がらせ、現代社会における知覚の立場から過去の伝統を脱構築する、両義的な「メディア時代の人間学」とも言うべき方法論を持って、明らかにしようとするものである。

《審査の概要および評価》

審査において高い評価が与えられたのは、以下の点である。

- ① 今なお活躍を続ける現代ドイツの代表的作家シュトラウスの思想・作品の展開を明らかにすることを大きな枠組みとして据え、そのために全体としては作家の評伝としての形式が前面に出ているが、ドイツでもまだ本格的な研究書の出ていないシュトラウスの作品と研究文献を徹底的に読み込み、幅広い文献に対する知識をバックグラウンドにしながら、現在にいたるシュトラウスの展開を緻密に描き出していることは、何よりも高く評価できる。
- ② シュトラウスが70年代から西ドイツ演劇界を牽引した人気劇作家でありながら、いまでも殆ど体系だった紹介がなされていないのにはもろもろの理由が考えられるが、何よりも彼の営為には政治的・演劇的・文化的な諸要因が複雑に絡み合っていて、単純には論じにくい作家であるからだろう。その上で大塚氏が取った手法

が、〈68年〉、〈77年〉、〈89年〉、〈2001年9・11〉という明確な分水嶺が引けたことも手伝ってか、第1部=70年代、第2部=80年代、第3部=90年代、第4部=00年代という通時的な切れ目の横軸をおきつつ、そこにそれぞれの時期のシュトラウスの文学・戯曲のテキストを配置しながら、批判理論とメディア理論のはざまに立って、その座標軸で、彼の演劇美学と演劇文化の可能性を両義的に測定しようという企てである。文学テキスト至上主義にも、通時的な時代論や紹介的な作家論だけでも、演劇（批評）論一辺倒にも偏しないための、その挑戦の斬新さと大胆さは評価されている。

- ③ ドイツにおいてもシュトラウスは毀誉褒貶の激しい作家で、何より『山羊の歌』をめぐる論争はジャーナリスティックに受けとめられたが、大塚氏はそのような一面的理解の背後を丹念に見つめつづけて論争の意義を追い、それを自分なりに時代の文脈の視点から整理し直しつつ、演劇および文学メディアの再生の可能性の座標軸として新たな視点から提起し、そのことでシュトラウスの作品全体の現代的な位相と意義を確かめようとしている。すなわち『山羊の歌』までのシュトラウスが「批判理論」から「構造主義」への質的転換を現代社会に即して具体化していたのに対して、『山羊の歌』以降から現在までのシュトラウスの試みはさらなる時代変化を前により積極的に演劇の始原との呼応を強めて神話的暴力の再構成である「悲劇」の再生を前面化していること、それは同時に、ポストモダンの時代における演劇と文学の可能性を探る試みでもあるのではないかと問い直して、本論文はシュトラウスのそのような試みに至る経過と意義を詳細に後付けている。
- ④ この論文が出版されれば、日本で最初の充実したポーター・シュトラウスの評伝になるとともに、現代ドイツの文学・演劇・思想の展開をとらえる上で意義のある視点を提示してくれる書物になるであろう。

しかしながら、同時にいくつかの疑問点も提起された。

- ① 果敢な挑戦ゆえに、とらえるべき宇宙の広げ方の大きさにやや言葉と論理がついていけず、息切れ状態や定義不十分に陥っている観もある。大塚氏の出自がゲルマニスティク（ドイツ文学研究）であることもあって、シュトラウス文学・戯曲研究としてはその長いキャリアでの考察を詳細かつ大局的に行い説得力を有しているが、それらの学問的タームは演劇学やパフォーマンス研究、メディア理論からみるとずれているものも多く、定義が不十分で、その分野での理解や知識も十全とは言えない。
- ② その代表例が、副題でもある「メディア時代の人間学」の定義の曖昧さだろう。シュトラウスのスタンスはむしろ、「メディア時代」と呼ばれる時代現象への「人間学的」な抵抗にあるのではないか。それゆえにこそ、演劇という最古の文化形式は

彼にとって何よりふさわしい、好都合のメディアム=媒体だったのではないか。ギリシア劇やシェイクスピア、チャーホフ/ゴーリキーなどの過去の「演劇の時代」の作品との対決/対峙としての「改作劇」という手法をシュトラウスがとるのは、そのことと通底していよう。とすればタイトルがずれてはいないか。

- ③ 現在の演劇研究は、1980年代から上演分析を中心に行われる方向にシフトしている。大塚氏の論では、レーマンの「ポストドラマ演劇」の理解も少しずれているように思われるし、上演分析の立場からシュトラウスの「メディア戦略」を仔細に検証している箇所がほとんどなく、作品を論じるうえでも、テキストとコンテキスト、ドラマ/戯曲とパフォーマンス/上演の関連がいまひとつ不分明である。文学と異なる演劇の独自性については演劇学研究でも明確にされているし、戯曲研究と演劇研究が截然と分かれるようになった最近の学問的趨勢を考慮すれば、大塚氏の論は文学・戯曲研究の側からの演劇美学考察への架橋の試みと位置づけられるものであろう。
- ④ 論議を呼んだ難解なテキスト『高まりゆく山羊の歌』に試訳もそえつつ、これに真っこうから挑んで政治的文脈に演劇論的文脈に対置させ、批評的に救済しようとする大塚氏の意図には納得できるものがあるものの、これが本論文の核を形成するものであるとすれば、いまだそれは説得しきれぬ域には到達していない。このテキストが「歴史家論争/ドイツ再統一/ネオナチ問題」と切り結びつつ、同時にシュトラウスの「演劇美学」の位相と関連するもの、あるいは戦略であることを、もっと説得的に論じきる必要と可能性があるのではないか。

以上、シュトラウスを研究対象に扱う困難さとともに、審査委員がそれぞれシュトラウス研究や演劇論、メディア論、ドイツ現代思想での気鋭の研究者揃いであったこともあって、「問題点・疑問」として挙げられた点がかかなり前面に出てしまったが、これらはいくまでもこの論文の包括的できわめて洞察に富む分析に対する評価を踏まえた上でのものである。本論文は、対象に関するきわめて幅広い知識、(通俗的な評価に対する)新たなポーター・シュトラウス像の提示、そして自由闊達な論文としての表現といった点において、博士論文としてそのレベルに達したすぐれた論文で、果敢な挑戦の「シュトラウス論」であることは疑いない。博士学位取得の暁には、今回の審査での批判を受けた上での手入りを十分に、さらに力ある画期的な一冊本として刊行されることを、審査委員会としても願い、かつ期待している。

また上記の評価すべき点および疑問点については、口述試験において学位申請者から補足的な説明を受け、大塚氏自身が納得する部分もあり、その理解や受け答えも適切であったので、最終的に審査員が審議した結果、本論文は博士(学術)の学位に値するものであり、今後のさらなる研鑽に期待するという認識で、委員会は一致した。